

育児における父親の役割と保健指導に関する研究Ⅲ

— 総括報告 —

総括報告者：川井 尚

研究者：川井 尚¹⁾，庄司順一¹⁾，恒次欽也²⁾，横井茂夫³⁾
若麻績佳樹³⁾，大藪 泰⁴⁾，前田忠彦⁵⁾，森田英雄⁶⁾
倉繁隆信⁶⁾，奥原義保⁷⁾，北添康弘⁷⁾，吉田弘道⁸⁾
David Shwalb⁹⁾，野尻 恵¹⁰⁾，尾崎真理子¹¹⁾
安藤朗子¹²⁾，甲斐静江¹³⁾，西林洋平¹⁴⁾

〔要約〕 本研究は父親の果たす基本的な役割を明確にすることを第一の目的とし、その知見を保健指導などの育児相談にいかに関適用するか、父親を含めた相談のあり方を検討することにある。そのために、本研究班全体の課題として昨年度から引き続き行った調査研究を中心に、班員による調査研究と臨床研究の知見を加え、検討した。

本研究班の従来の研究知見と本年度の三つの調査研究から、母親ないし母子関係の基本的役割のように最も本質的な役割を見いだすには至らなかったが、父親の役割について今後解明しうる手掛かりは十分示し得たと考える。

また、臨床研究として、35例の心理相談を通しての分析と小児科医としての健診時での実際的対応、及び臨床心理の立場からの父親面接の基本の提示を行った。今後、保健指導など父親が参加した、あるいは父親を視野に入れた臨床研究、事例研究を積み重ねていけば、その相談の手引きの作成は成し得るであろうし、今後の重要な課題である。

見出し語：父親の役割、父親と健診、保健指導、父親の臨床研究、父親面接

-
- 1) 日本総合愛育研究所・愛育相談所 2) 愛知教育大学 3) 都立母子保健院
4) 早稲田大学 5) 統計数理研究所 6) 高知医科大学小児科 7) 高知医科大学情報センター
8) こどもの城小児保健部 9) 光陵女子短期大学 10) 桜ヶ丘記念病院 11) 都立梅ヶ丘病院
12) 都立教育研究所 13) 東京都三鷹保健所 14) 小児科・内科たちばなクリニック

研究目的

本研究班の目的は、父親の基本的な役割とは何かを明らかにし、育児に寄与しうる知見を示すとともに、それに基づいた乳幼児健診の保健指導や育児相談のあり方を提起することにある。この目的を果たすために、以下に述べる研究方法をとり、研究をすすめた。

I. 調査研究

1) 育児における父親の役割に関する研究

—クロス集計の結果から—

両親1150組、児の年齢（平均4,4歳、0から7歳）を対象に41項目から成るアンケート（父親版、母親版）を施行し統計的分析を行った。〔研究班全体の研究課題〕

2) 父親の育児援助と母親の育児状況

赤ちゃん会（生後3カ月から1歳6カ月）、1770名（父親同伴836名）、及び乳児健診50名（父親同伴25名）の父母を対象にアンケートを施行し統計的分析を行った。

〔森田班員ら〕

3) 父親による母親の育児満足感の評定

—母親の自己評定との関連—

生後4カ月児（100名）、10カ月児（93名）の父母を対象にアンケートを施行し統計的分析を行った。〔大藪班員ら〕

II. 臨床研究

1) 子どもの発達における父親の役割と

援助に関する研究—心理相談の事例研究を通して—（その3）家族関係と子どもの発達 〔吉田班員ら〕

症状の発生及びその改善に父親が強く

影響を与えていると臨床的に判断した35事例（男子20例、女子15例）を対象に事例研究をおこなった。

2) 父親参加の乳幼児健診における小児科医としての実際的対応

健診医としての臨床経験からそのポイントを示した。〔横井、森田班員〕

3) 子どもの心の問題に関する父親面接の基本〔川井班員〕

臨床心理の立場から、これまでの本研究班の知見と自らの臨床経験に基づき、父親面接の基本を示した。

本報告では研究班全体で行った、調査研究1)の研究成果を中心に各グループ研究の知見を合わせ、父親の役割と保健指導に主たる焦点をあて本研究班の総括報告とする。

研究成果の総括

I. 調査研究

1. 父親の役割

a) 父子関係：ここでは父親から子どもへの父性行動に関わりの積極性、消極性の観点から分析すると次のような結果が得られた。

即ち、子どもへの関わりの積極性は「育児、家事の母親の肩代わり」「育児、家事の分担」「主導的役割」「妻の相談相手」「母と子を援助する」「家族を見守る」という父親の役割と有意な関連が認められた。

また、積極的な父親の子どもは「活発」「楽しい」「心身状態快調」であるのに対して、消極的な父親の子どもは「理解できない」「話が合わない」と父子関係の問題が示唆さ

れた。

さらに子どもと積極的に関わろうとする父親は、父子関係だけでなく自分の育てられた環境にも肯定的であり、夫婦関係も良好との結果を得た。

b) 父親の相談行動、乳幼児健診、育児教室への父親参加：これらに行動、参加する父親は「育児、家事の母親の肩代わり」「家事育児の分担」「妻の相談相手」の役割と関連している。また、子どもに積極的に関わる父親は、妻が育児に悩んでいるときや、子どもに心配があれば相談にいきたいとしたが、消極的な父親は相談にも消極的であった。

さらに、困ったときの相談相手について、消極的な父親には相談相手が「いない」の選択と関連が強く、相談しにくい人たちであることが推測される。

従って、父親としての役割が家庭内に明確に位置づけられているとき、父子関係のよさ、そして乳幼児健診などへの子どもや妻のことで相談行動と結びつきが生じやすいといえよう。

c) 母親就労と父親の役割：母親の就労は父親の取る役割に少なからず相違をもたらしている。すなわち、母親が働いている場合には「父親としても家事・育児をはたす」役割が有意に多く、「仕事を通して家庭に貢献」

「最終的な判断をくだす」「妻の支持、相談相手になる」「客観的な立場で母と子を援助する」役割は有意に働いていない母親に多い。従って母親が就労している場合には、母親は具体的な育児・家事への支援の役割を求め、

一方専業主婦では父親の精神的役割を求めているといえよう。

2. 父親の心身状態

父親の心身状態の良さは、子どもへの関わり方の積極性と関連を有している。つまり、積極的な父親は「冷静」「のんびり」「心身快調」と、一方消極的な父親は「疲れている」「意欲がない」「熟睡できない」「心身不調」との関連が認められた。父親の心身状態には子どもとの関係が反映されているものと考えられる。

このことは、さらに子どもの問題とも関連している。即ち、父親の「いらいら」「熟睡できない」「心配性」「几帳面」と、子どもの「指しゃぶり」「おねしょ」「小食」「その他」などの行動と関連が認められている。

また、「疲れている」「いらいら」「几帳面」「心配性」「きまじめ」といった父親の状態と子どもの「神経質」「落ちつきがない」「心配性」とは強い関連をもち、さらに「恐がり」「内気」「甘えん坊」「几帳面」「完全壁」とも関連を有している。また、日々楽しく過ごしている父親では育児援助の多いものが40%、一方疲れている父親では29%であり、父親が楽しく生活している場合に有意に育児援助が多くみとめられた。

逆に、子どもの心身状態に影響を与えるものとして、父親が子どもを「理解できない」「話ができない」ことが関連をもっていることに注目したい。

従って、父親の心身状態は父子関係の有

りようや、そしてその結果として子どもに大きく、そして多様な影響を与えているといえよう。

3. 父親の役割観の要因

前述のように、父親の役割観が家族・家庭に位置づけられていると、父親として家事、育児に参加し、相談行動も積極的にとる傾向にある。それに対し、父親の役割を明確にもたない父親は、家庭・母と子との関わりが希薄であり、子どもの状態が「いきいき」「楽しそう」ではなくなる傾向にある。

さらに、伝統的な父親観に重みをおく父親は、家族に対し支配的で一方的な傾向にある。大藪らはこのことを、父親の「仕事中心志向」と「家庭中心志向」の観点から分析し（4カ月児、10カ月児の父親）、仕事中心志向型は母親の育児満足感、夫婦関係など家庭に関わる領域との関連が薄い。一方、家庭中心志向の父親は母親の育児満足感、母親の自己評価、乳児の気質、自分の協力度、夫婦関係の良さを高く評定し、母親の仕事阻害感は低く評定している。これらは、常識的見解と考えるが、しかし相談をすすめる上で十分心得ておくべきことであろう。

4. 母親の育児への自信、安心感、満足感、楽しさの要因

母親の育児に対する自信、安心感について：父親は母親が思う以上に自信や安心感を母親がもっているとしている。すなわち、母親の育児への自信のなさや不安感に父親は十分気

づいていない可能性がある。

森田らの調査研究によると、父親との会話の多い母親は育児について有意に自信とさらに楽しみを見い出している。

困ったときに相談できる相手として、それぞれ「配偶者」を高頻度で選択している。しかし、母親の方が多岐にわたる相談相手をもっており、父親へのサポートシステムの不十分さが認められた。

大藪らの4ヶ月児と10ヶ月児の両親を対象とした母親の育児満足感についての研究によると、a)10ヶ月児の母親は、4ヶ月児よりも育児満足感が低下し、仕事の阻害感が強く、しかも父親の育児の協力度が低下したと母親は評価している。

b)4ヶ月児の母親の育児満足感に影響する要因は、母親では育児による仕事の阻害感が2番目にきているのに対し、父親にはこの要因がみられない。父親は自分と妻および子どもとの関係にのみ目が向けられ、母親との意識にズレが認められる。そして10ヶ月児では、このズレはより顕著になり仕事の阻害感が最も強くなるのに対し、父親は母親のもつ仕事と育児との葛藤があること、更にこの葛藤が母親の育児満足感に影響していることに気づいていない。

父親は夫婦関係と子どもの育てやすさが、母親に育児満足感をもたらす大きな要因と考えている。

5. 両親の年齢要因

父親と子どもとの関わりは、父母の年齢

がすすむほど量的に減少する。

また、相談に必要な人・機関として「児童相談所」「教育相談所」を選択するものが父母の年齢がすすむほど増加している。

6. 母親の就労要因

前述のように、母親就労は父親の役割に大きな違いをもたらしているが、日常生活においても相違がみられる。すなわち、専業主婦よりも働いている母親の方がその父親の子どもとの関わりが、乳児期から現在にいたるまで有意に多く、その評価は父母共に一致している。

また、父親の家族への協力の仕方も就労している場合「家事の手伝い」「子どもの身の世の世話」など具体的援助が多い。

相談機関の開設条件について、働いている母親は日祭日、土曜、夕方6時以降、あるいは休暇制度など多様な配慮を求めている。

II. 臨床研究

1. 子どもの心理的問題と父親の要因

吉田班員らの研究グループは、父親・母親・子どもの三者関係を、情緒交流の方向と量、質の点から事例を分析し、それによると、

a) 予後良好群の特徴は、1) 相談開始時にすでに夫婦関係が安定していた。2) 母子関係が希薄あるいは干渉的ではあっても、共生関係は認められない。3) 夫婦関係、父子関係、母子関係のうちいずれかの関係が組合わさって変化する。

b) 予後不良群の特徴は、1) 夫婦関係が不安

定で、しかも母子は共生関係にある。2) 夫婦、父子、母子関係の変化が生じた事例は稀であった。

c) 心理的問題の改善の特徴は、1) 父・母・子の三者関係が安定する場合と、父子、母子の二つの関係が安定化する場合がみとめられた。2) 夫婦、父子、母子のそれぞれの関係に改善が生じ、しかもこの三つの関係が相互性をもって改善の方向に変化した。

これらの事例研究により、子どもの心理的問題を家族全体からとらえ、援助するとき子どもはもちろんのこと、母親だけでなく父親も含めた家族全体を視野に入れて援助することの重要性を指摘している。

2. 父親参加の乳幼児健診での小児科医としての実際的対応

まず大前提として、父親をいかに乳幼児健診の場にさそい、その実現をはかるかが重要である。相談に妻といっしょに行ってもよいとする父親は比較的多く(68,7%)、健診に参加したのもも24,3%いる。そこで積極的な働きかけがあれば参加の比率をあげる可能性は高い。理想的には、森田論文にあるように1カ月健診の際、母親に次の健診には父親と来るよう依頼できるとよい。3,4カ月,6カ月,1歳半健診など機会があるごとにさそいたい。

ここで重要なことは、父親が健診にきたことが父親自身の利益になるということである。きてよかったと思ってもらふことといつてよい。父親の利益は、母親の、そして子どもの

利益につながる。それには、小児科医をはじめ健診スタッフが、父親を積極的に気持ちよく歓迎し、接するかが基本的に大切なことである。この目的を果たすために小児科医として、横井、森田班員がそのポイントを示した。

- 1) 約束の時間を守り、なるべく待たせない。
- 2) 健診医は父親の話をよく聴き、受診児の状況を把握し適切に伝える。「心配ない」「問題ない」「やり方がわるい」などの一言の対応ではいけない。
- 3) この機会に健康乳児の標準的な心身の状態や摂食など育児上のこと、発達など基本的な事柄について説明し、できれば、引き起こしの検査など父親にやってもらうのも得策である。つまり、子ども理解や子どもの接し方を学んでもらおうというわけである。
- 4) 正常範囲、病的状態ではない場合の対応：例えば、「やせている」「ふとっている」「小食」「大食」「偏食」「夜なき」「指しゃぶり」父親、母親自身乳幼児期にどうであったか尋ね、似ていればその旨を話、安心していいと伝える。
- 5) 有所見、問題がある場合：3パーセント以下の発育、頸定のおくれ、歩かない、言葉のおくれ、あるいは情緒、行動的問題を認めた場合、具体的に伝え、そして重要なことはそれに対する父親の考え、意見、気持ちをよく聴くことである。加えて、必ず「何かおききになりたいことはありませんか」と、確かめることである。最後に次回の健診までに、家庭でできること、しておいてほしいこ

とを、具体的に話し実行してもらうよう依頼する。

そして、今後の方針、いわば事後措置—精密検査や心理相談、療育相談—など具体的な方法とその意味をきちんと説明する。

3. 子どもの心の問題に関する父親面接の基本

子どもの心と発達の問題に関しての母親面接の方法については、これまでに示されてきた。しかし、父親面接については本論文に述べたいいくつかの理由によって、その基本的考え方や方法を示したものは、殆どないといってよい。そこで、われわれの研究班の知見と筆者の父親面接の臨床経験から、その基本と考えられるところを述べた。

1) 父親面接の必要性

通常の育児においてさえ、母親のみがその役割をもつことは極めて困難の状況にあることを本研究班の知見でも示した。尚更のこと心身障害児や情緒、行動的問題が子どもに生じたとき母親のみが背負い、解決をはかることは極めて困難である。加えて、母と子の面接のみを長く行っていると、母親は成長、変化し、その結果父親はおいていかれ、かつ母親との考え方にズレが生じ、夫婦関係が余計おかしくなりかねない。

従って、母親を通して、是非お出でいただきたいと丁寧に誘うことが大切である。どうしても来談されないときは、面接のなかで父親の考え、気持ちなどを積極的に話題にすることによって、前述の不利益を防ぐことにな

る。

2) 父親がはじめて来談したとき、大変歓迎しているとの気持ちが伝わるのが大切であり、まず父親の話によく耳を傾け聴くことから始まる。

3) 父親面接の心得

A) 父親は子どもの状態、問題について理論的で具体的な説明を求める傾向がある。そこで、面接者の応答、答え方も理論的になり面接初期はいわば理屈から入っていくことになる。この利点として、父親とのやりとりを母親が聞くことにより、これまでと違う観点からの子ども理解を母親ができることにある。

B) 子どもについての心配、不安は覆われ、表面上冷静、客観的態度をとりやすい傾向と、また父親に限らず男性は気持ちを表現し伝えることが不得手であることを心得ておきたい。

一方不安をはじめ情緒、感情を抑えている父親のなかに、感情的になると母親が余計心配し不安がり子どもによくないと思う人もいるので、性急に判断しないことである。

C) 父親は、母親に比べ情緒、感情レベルの相互的な人間関係の把握が不得手である。

そこで、父子、夫婦関係だけでなく、面接者とのこのような関係をもつこともむずかしい。このことを心得て父親との相談関係をつくっていくことになる。

D) 面接の基本的方向は、関係そのものを相談対象とする。つまり、子どもとの、妻との、そして母と子との関係を取りあげ、その関係体験を表現できるよう面接をすすめる。

e) 面接は理論、観念的レベルから入り、考え

る力を保ちながら、情緒、感情レベルへ、そして関係を中心とした面接へとすすめることがコツである。

4) 父母合同面接の心得

相談は子どもが主役であり、従って夫婦が一緒に考え、荷を分かち合い、打開していくという意味で父母合同面接が望ましい。

そこで、これまでに示した父親面接の基本を踏まえ、その際の心得を述べると次のようである。面接初期は子どもについて母親が一番よく知っているので、母親主導になることは当然である。父親と面接者は母親の話をよく聴いて子ども理解をすすめることと、同時に面接者の役割として、母親の話をもより分かりやすく父親に伝えたり、その意味を解釈することにある。

また、母親が父親のこれまでの有りようへの不満、恨み、つらみを父親にぶつけることも稀ではない。一方父親はそれに対し面接場面で母親を攻撃することは稀である。

このとき、面接者は公平なレフリーの役割を取ることが重要であり、父親のみを悪者にしないよう心がけること、父親がどう感じ、考えるのかをよく聴くことが肝要である。これに上手に対応しないと、父親は傷つき、面接からも、家族からも心が離れかねず、合同面接がかえって不利益を生む。

父母合同面接の目標は、父母協力して子どもを援助すること、吉田班員らの知見に示されたように、夫婦、父子、母子のそれぞれの関係の改善にある。

以上、3年にわたる本研究班の父親研究を通して、育児に関しても、そして子どもに関わる問題にも父親の参加あるいは父親を視野に入れた保健指導をはじめとする相談が必要であることを明らかにした。そしてそのための手引きの作成が今後の重要課題であることを指摘した。

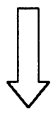
文献

1. 育児における父親の役割に関する研究 I・II・III 厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」（平山宗宏主任研究者）平成元年、2年、3年度研究報告書
2. 川井 尚 育児における父親の役割 小児保健研究 51(6)671- 680 1992
3. 育児における父親の役割と保健指導に関する研究 I・II 厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」（日暮真主任研究者）平成4年、5年度研究報告書



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



[要約]本研究は父親の果たす基本的な役割を明確にすることを第一の目的とし、その知見を保健指導などの育児相談にいかに関適用するか、父親を含めた相談のあり方を検討することにある。そのために、本研究班全体の課題として昨年度から引き続き行った調査研究を中心に、班員による調査研究と臨床研究の知見を加え、検討した。

本研究班の従来の研究知見と本年度の三つの調査研究から、母親ないし母子関係の基本的役割のように最も本質的な役割を見いだすには至らなかったが、父親の役割について今後解明しうる手掛かりは十分示し得たと考える。

また、臨床研究として、35例の心理相談を通しての分析と小児科医としての健診時での実際の対応、及び臨床心理の立場からの父親面接の基本の提示を行った。今後、保健指導など父親が参加した、あるいは父親を視野に入れた臨床研究、事例研究を積み重ねていけば、その相談の手引きの作成は成し得るであろうし、今後の重要な課題である。